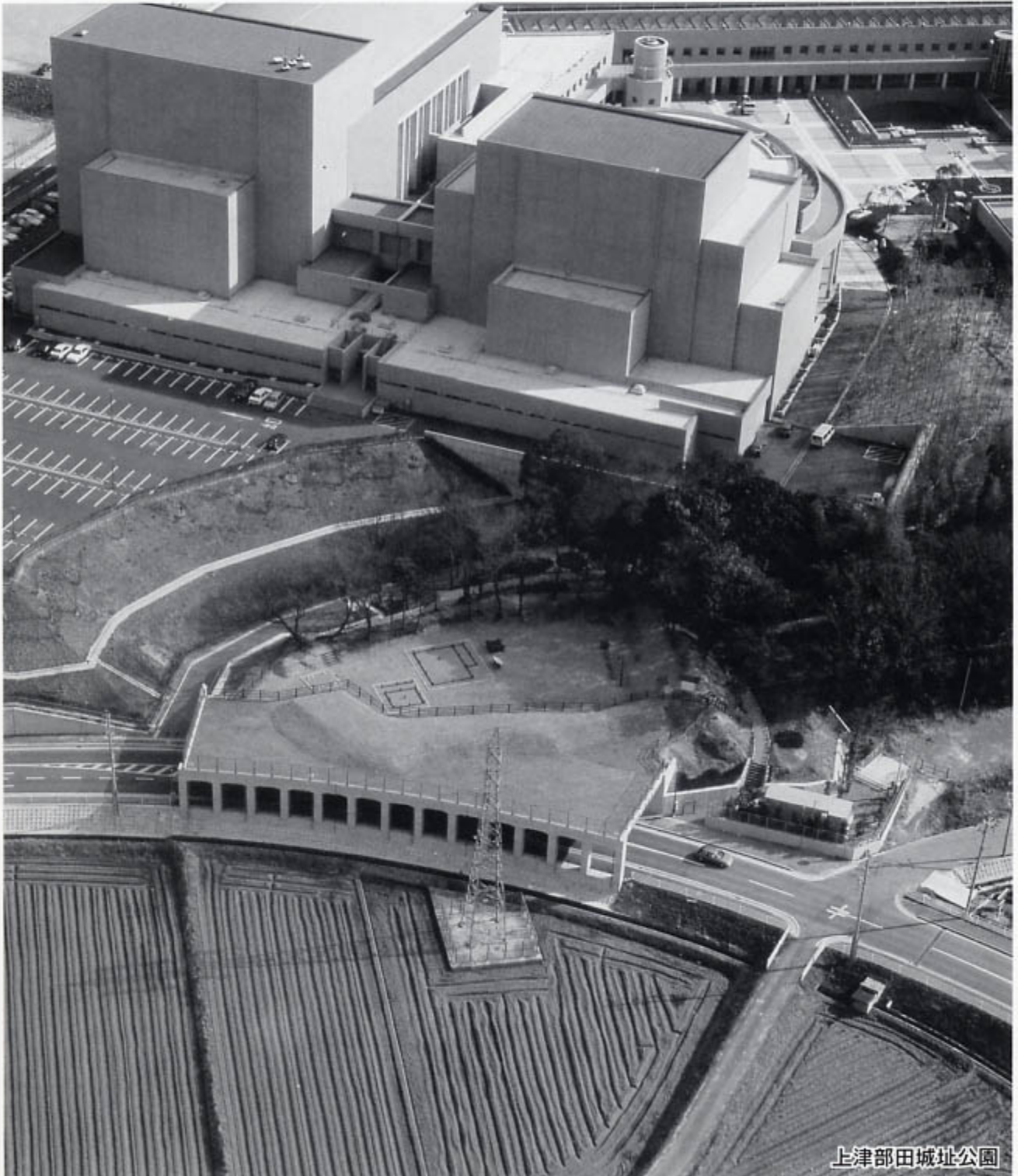


# 埋文センターニュース

第19号

2004.3.31

津市埋蔵文化財センター





## 津市の中世城館

全国に所在する城の数は、数万ともいわれていますが、これらのほとんどは中世に築かれたものです。城といえば一般的に天守閣や高い石垣、水をたたえた大きな堀をもった江戸時代の城がイメージされやすいのですが、中世城館でこのような施設をもつものは、ほとんどなく、山や谷、沼などの自然の地形を巧みに利用して築かれたものが多数を占めています。

このような中世城館は、三重県内だけでも千箇所以上も存在することが確認されており、時代や目的を反映した様々な種類のものがみられます。津市の周辺でも、現在までに多くの発掘調査が行われており、数々の成果が報告されています。ここでは、これらの発掘調

査で得られた資料をもとに、津市の中世城館の状況を紹介します。

雲出島貫遺跡は、雲出川北岸の平野部に位置する遺跡で、大規模な堀をめぐらせた11～12世紀代を中心とする城館と、これを囲う三重の大溝や人工的な水路が検出されています。遺物のうち、大量に出土した土師器は、京都系のものを中心に構成されています。一方、貿易陶磁器も多く、白磁は特に広東系の碗類が充実しています。このような時期にまで遡る城館は全国的にもあまり例がなく、水陸交通の拠点としてだけでなく、遺跡と隣接する木造庄との関連の可能性なども指摘されています。

川北城跡は、志登茂川北岸の南端部に築かれた鎌倉時代を中心とする大規模な城館です。堀と土塁で区画された郭が7箇所以上あり、60棟以上もの掘立柱建物が検出されています。郭のなかの掘立柱建物については、堀や土塁と同じ方向のものが多く、かなりの規格性をもって建てられていたことがわかります。居館としての性格が強く、日常雑器の土師器や山茶碗のほか、貿易陶磁器も多数出土しています。

室町時代から戦国時代にかけて、津市とその周辺には多くの中世城館が築かれています。これについては美里村北長野を本拠とし



主要中世城館位置図



雲出島貫遺跡 (写真提供 三重県埋蔵文化財センター)



雲出島貫遺跡出土遺物 (三重県埋蔵文化財センター蔵)



て、安濃郡と奄芸郡を領有する長野氏と、美杉村多気を本拠として、南伊勢を領有する北畠氏の対立の構図を反映したものと考えられています。

垂水城跡は、垂水地区の丘陵の東端に築かれた城館です。主郭より北側は宅地造成によってすでに消滅していましたが、本来は丘陵頂部に主郭を築き、そこから四方へ延びる尾根に郭や堀を設けていたものと考えられます。天文18年（1549）には、北畠氏と長野氏の間で合戦が行われたと考えられています。文献や絵図などから、垂水城跡は北畠氏側の北鷲城にあたと推定されています。垂水の地は、北畠氏と長野氏のそれぞれの領域である一志郡と安濃郡の境界近くに位置していますが、垂水城跡からの眺望は非常に良く、敵を監視するのに絶好の位置にあることから、この城は北畠氏の最前線基地のような役割を果たしていたのかもしれませんが。

洪見城跡は、安濃川の支流である美濃屋川の北岸の丘陵に築かれた大規模な城館です。大小さまざまな郭が階段状に配置されており、南側には登城路をもちます。北側に幅8m、主郭からの深さ18mという大きな堀と土塁をめぐらせて、堅固な造りとなっています。主郭の北半部では、掘立柱建物や井戸などが検出されています。

峯治城跡は、見当山丘陵の突端部に築かれた城館です。発掘調査の結果、東西約200m、南北約120mにわたる津市内では最大級の中



川北城跡



川北城跡出土遺物



垂水城跡



垂水城跡出土遺物



垂水城跡 堀



澁見城跡



澁見城跡出土遺物



峯治城跡



峯治城跡出土遺物

世城館であることが確認されています。深い堀と土塁を築き、さらに外側にV字状の堀をめぐらせるなど、強固な守りを意図した構造となっています。これらの遺構の配置から、防御の主眼は北側に向けられていたものとみられ、より北側を意識した城づくりが行われたと考えられます。峯治城跡で特徴的なのは、出土遺物に土師器の鍋釜類の多いことです。これらは、いずれも使用されたことが明らかで、煤の残るものも多くあります。したがって、この城は生活の場として機能していたことがうかがえます。

上津部田城址は、峯治城跡の約500m西の丘陵に築かれた比較的規模の小さな城館で、峯治城跡の支城とも考えられています。四方を土塁で囲まれた主郭の北東隅には虎口があり、門、掘立柱建物、井戸などが検出されています。道路建設にともなって一部が消滅したものの、その後復元され、史跡公園として整備されています。(村木一弥)



上津部田城址



上津部田城址出土遺物



## 遺物紹介⑱ 六大B遺跡 石帯の巡方

六大B遺跡は、津市大里窪田町にあります。平成2年度から行われた発掘調査の結果、古墳時代終末期から平安時代を中心とした多数の建物と、各時代の遺物が見つかりました。遺物には、奈良時代の和同開珎（銀錢）、木簡、瓦、土馬、硯、平安時代の緑釉陶器、石帯の巡方など、一般的な集落にはないものが多いです。このことから、古代の官衙（役所）、あるいはそれに関連する施設の可能性も想定されています。その中から、今回は「石帯の巡方」を紹介します。

古代の役人は、服の色や帯の種類で位を表すことになっていました。これは、当時の中国（唐）の制度をモデルにしたものです。しかし、このような帯は中国古来のものではありません。じつは、中国も北方の草原地帯に住む騎馬遊牧民になったのです。

中国人（漢民族）の伝統的な帯は、組み紐や布の帯でした。服の裾は長く、上品ですが動きにくいものです。いっぽう遊牧民は、馬上で動くのに便利な服を着ていました。これ

を胡服といい、それに伴うのが金銀宝石の飾りが付いた革帯です。中国はこれを取り入れ、独自のスタイルをつくりあげました。初めは王侯貴族のファッションとして流行し、その後、朝鮮半島や日本（古墳時代）へも伝わりました。ただし日本では後に続かず、奈良時代初めに新しい制度が誕生します。それが新国家建設に伴って導入した唐の律令です。革帯の飾りは役人の階級章になっていました。

革帯の飾りを鈔かぎといいます。日本では、初め金銀銅製でした。四角を巡方、丸を丸柄、先の飾りは鉞尾たぎ、バックルは鉸具かぎといいます（図1）。上級役人用の鈔は金銀製、下級役人用は銅製に黒漆塗りでしたが、平安時代初めに金属製の鈔を禁じ、石製に変更しました。石帯の誕生です。材質の区別はなくなりましたが、色の区別はあったかもしれません。黒が多く、他の色は少ないからです。

六大B遺跡の鈔は黒い石製です。大きさは、縦約41mm、横約43mm、厚さ約7mm。垂孔（細長い孔）は垂れ飾りを付けるところで、長さ約21mm、幅約2mm。裏面4カ所に帯に取り付けるための潜り穴があります（図2・3）。石製であること、垂孔が細いことから平安時代のものと思われます。黒い色は下級の役人を表すのかもしれませんが。ただし遺跡の性格の研究は、まだこれからです。（山口 格）

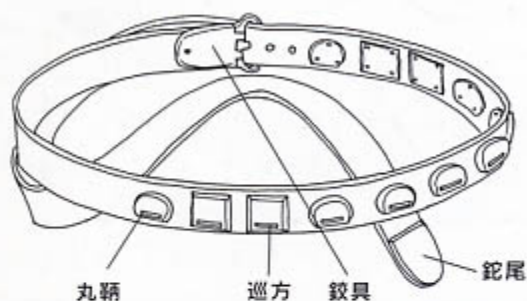


図1 革帯復元模式図

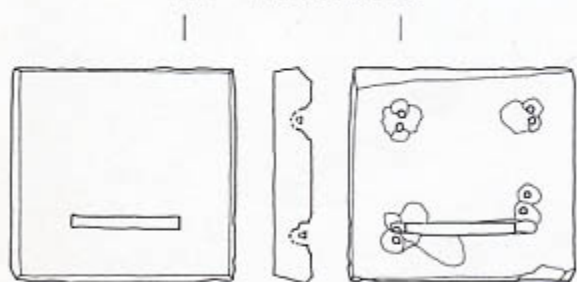


図2 巡方実測図（2：3）

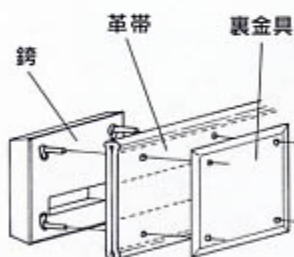
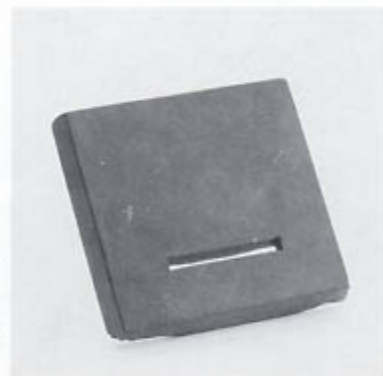


図3 装着方法模式図



巡方(表側)  
(三重県埋蔵文化財センター蔵)



## 遺跡紹介⑬ おこし古墳

今回は、津市緑が丘一丁目に所在するおこし古墳を紹介します。

おこし古墳は、市西郊の標高約30mの丘陵上に位置する前方後円墳で、現在は緑が丘団地の南端に古墳公園として保存されています。「緑が丘」という地名は、緑が丘団地の造成に伴って昭和62年に住居表示変更されたもので、それ以前、古墳は津市大字野田字稲葉に属していました。団地造成前の地形図を見ると、おこし古墳はちょうど丘陵と丘陵が枝わかれたところに東北方向の尾根筋に沿って築造されていることがわかります。

おこし古墳は全長が29.0m、後円部の直径が20m、高さは墳丘の西側で3.8m、前方部は幅が15mで、前方部の長さが後円部径の約2分の1と短く、また、前方部と後円部の高さにあまり差がないのが特徴です。

墳丘の表面には葺石や埴輪は認められませんが、古墳公園として整備した際に、墳丘から須恵器の杯身と壺の破片が採集されており、その須恵器からおこし古墳は6世紀前半に築造されたものと考えられています。

さて、ここで、おこし古墳の周辺にも目を向けてみましょう。おこし古墳の約250m東北には鎌切1号墳があります。鎌切1号墳はおこし古墳と同様、発掘調査を行わないで現状のまま保存されているので、古墳の詳しい

ことはわかりませんが、全長50mの前方後円墳で、市の史跡に指定されています。このほかにもおこし古墳周辺には、全長が37.5mの前方後円墳である鎌切3号墳をはじめ、かつてはたくさんの古墳がありました。団地造成に伴い昭和59～60年に実施された鎌切3～6号墳と稲葉1～5号墳の発掘調査では、これらが5世紀後半～6世紀前半に築造された古墳群であることや、鎌切3号墳がおこし古墳に続いて6世紀前半に築造された前方後円墳であることなどが明らかになりました。

ところで、前方後円墳という古墳の形は、ヤマト王権との強い結びつきを示した古墳のなかで最も格式の高い墳形だといわれています。また、古墳の形や大きさは、その古墳が造られた時期やその古墳の被葬者像などを考える上での大きな手がかりとなっています。

安濃川流域の前方後円墳では、4世紀末に伊勢湾を望む垂水丘陵上に築造された池の谷古墳が最も古く、全長約90mにも及ぶその規模から安濃川流域一帯を支配した大首長墓に位置づけられています。4世紀代に坂本山古墳群（片田志袋町）のような小規模な古墳群しか築造されていなかったこの地域に、突如として大型前方後円墳が出現した背景には、東へと勢力を拡大していくヤマト王権の関与が想定されています。しかし、5世紀前半に安



おこし古墳位置図 (1:25,000) (国土地理院「津西部」より)



おこし古墳



濃川中流域右岸に築造された<sup>あけあい</sup>明合古墳（安濃町）は、一辺が59.5mの2個の<sup>つくりだ</sup>造出しをもつ全長81mの方墳で、墳丘体積では池の谷古墳を上回りながらも、墳形は前方後円墳から方墳へと変わってしまいます。明合古墳以降、安濃川流域では大型古墳の造営は途絶え、5世紀後半～6世紀前半になって、全長が30～50mの小規模な前方後円墳が再び築造されるようになります。

鎌切1号墳、おこし古墳、鎌切3号墳の3基の前方後円墳は、5世紀後半～6世紀前半に神戸・野田地区に有力な首長が存在し続けたことを物語っています。この地区では神戸銅鐸と野田銅鐸が出土するなど、弥生時代とその先進性の端緒がうかがえるものの、その後は古墳時代後期に前方後円墳が築造されるまで、あまり際立った活動の痕跡がありません。今後、この古墳群造営の母体となる遺跡の発見などによって、この地区の地域像が明らかになる日が待たれます。（藤田充子）



団地造成前地形図(1:10,000)[白抜きは消滅した古墳]



おこし古墳出土須恵器（杯身）



おこし古墳墳丘測量図（1:300）

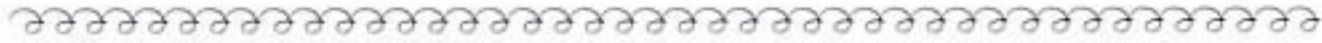


## 埋文センターからのお知らせ

4月から「埋文センターニュース」のバックナンバーを津市のホームページでご覧になっていただけるようになります。是非ご利用ください。

アドレスは

<http://www.info.city.tsu.mie.jp/edu/bunka/bunka-maizoubunkazai/>  
(津市ホームページ→施設案内→津市埋蔵文化財センターをクリック)



### 平成15年度 埋文センター日誌抄

- |   |  |
|---|--|
| <p>4月22日〈見学〉神戸小学校 93名</p> <p>5月6日〈普及〉出張講座(雲出小学校)</p> <p>13日〈普及〉出張講座(安東小学校)</p> <p>16日〈見学〉安東小学校 18名</p> <p>19日〈普及〉出張講座(育生小学校)</p> <p>〃 〈見学〉みえ社会保険センター 30名</p> <p>21日〈普及〉寿大学講師(豊里公民館)</p> <p>28日〈普及〉寿大学講師(高野尾研修所)</p> <p>〃 〈見学〉鈴鹿国際大学学芸員課程 13名</p> <p>29日〈普及〉選択教科講師(南が丘小学校)</p> <p>6月4日〈普及〉出張講座(高茶屋小学校)</p> <p>5日〈普及〉選択教科講師(南が丘小学校)</p> <p>7日〈普及〉「きらりふるさと発見講座」講師(中央公民館)</p> <p>12日〈普及〉選択教科講師(南が丘小学校)</p> <p>19日〈普及〉〃</p> <p>7月3日〈普及〉〃</p> <p>7日〈貸出〉四ノ野B遺跡出土遺物(鈴鹿市考古博物館)</p> <p>10日〈普及〉出張講座(敬和小学校)</p> <p>〃 〈普及〉選択教科講師(南が丘小学校)</p> <p>8月1日〈普及〉「斎宮ワカ探検隊」講師(中央公民館)</p> <p>6日〈普及〉総合的な学習講師(安東小学校)</p> <p>21日〈見学〉市政教室(南郊第1民生委員会) 25名</p> <p>9月11日〈普及〉インターシップ研修(静岡大学)1名</p> <p>17~19日〈普及〉職場体験(南が丘中学校) 1名</p> | <p>9月18日〈貸出〉高茶屋出土銅鐸(三重県埋蔵文化財センター)</p> <p>25日〈普及〉選択教科講師(南が丘小学校)</p> <p>10月7日〈普及〉〃</p> <p>8日〈見学〉寿大学(中央公民館) 29名</p> <p>9日〈見学〉〃 (中央公民館) 25名</p> <p>〃 〈普及〉総合的な学習講師(南が丘小学校)</p> <p>〃 〈普及〉選択教科講師(南が丘小学校)</p> <p>14日〈調査〉黒木遺跡確認調査</p> <p>15日〈貸出〉高茶屋出土銅鐸レプリカ等(鈴鹿市考古博物館)</p> <p>16日〈普及〉選択教科講師(南が丘小学校)</p> <p>22日〈普及〉〃</p> <p>24日〈見学〉安濃小学校(安濃町) 40名</p> <p>27日〈普及〉総合的な学習講師(高茶屋小学校)</p> <p>30日〈普及〉選択教科講師(南が丘小学校)</p> <p>11月5~7日〈普及〉職場体験(西郊中学校) 3名</p> <p>6日〈普及〉選択教科講師(南が丘小学校)</p> <p>8日〈調査〉安濃津遺跡群隣接地工事立会</p> <p>19日〈見学〉市政教室(桜橋二丁目自治会) 32名</p> <p>22日〈普及〉津ライオンクラブ親子歴史体験教室 80名</p> <p>2月17日〈見学〉神戸地区社会福祉協議会 50名</p> <p>21日〈普及〉考古学ゼミナール 20名</p> <p>28日〈普及〉〃 21名</p> <p>3月6日〈普及〉〃 17名</p> <p>8~10日〈調査〉平木遺跡確認調査</p> |
|---|--|

#### 〈編集後記〉

近年、出張講座や考古学ゼミナール、文化財ロビー展などの自主事業に加え、小中学校や公民館からの講師依頼が増えてきました。日誌抄を書きながら、埋蔵文化財センター業務の一つとして、普及事業の重要性を改めて実感しています。 (編集子)

発行日：平成16年3月31日  
 編集・発行：津市埋蔵文化財センター  
 〒514-0058  
 三重県津市安東町1225  
 TEL 059-229-0210  
 FAX 059-229-4601  
 印刷：共立印刷株式会社